

の模範と取り沙汰されるようになり、その建設状況も、勤勞奉仕隊員の活動が、しばしば満州日報などの中央紙に書かれて、全滿に紹介された。この頃、マンガ家の坂本牙城（当時、満州日報にいた）が、幸に河田も取材に訪れていたことを記憶している團員も多い。

ところで、そうした実績を賞われたのか、團長矢野武吉は、推されて、全連会議の議員に選出されたのである。これを聞いた團員達は、「うちの團長が、満州の国会議員に選出された。」と喜んでくれたという。
全連会議——正確には、満州國協和会全国連合会議という。

もともと、満州國には、日本の国会に相当する立法機關は設けられていない。多分、日本の支配上不都合であったにちがいない。そのため政党内存在しなかった。そして、満州國だけに見られる、協和会という独特の組織が設けられていた。昭和十七年の朝日年鑑によると、

「協和会は、大同元年三月の満州國の成立に於いて、同年七月二十五日創立された獨特の國民組織で、政府と表裏一体となり、建國の理想實現に当らんとする、國家的団体である。活動単位は分会で、地域別、職場別の二種あり、指導統括機關として、中央に中央本部、地方の行政単位へ省・県に地方本部がある。」とある。

この中央本部の意志決定に、政府の外から参与する手段として、全国連合会議が持たれていたもので、矢野團長は所屬する四平省開拓部会を母体下、議員に出ているのである。なお、このとき全連会議には、開拓關係から三名の議員が出ていたという。（つづく）

記録

わがふるさと、元田誌、

— 河 川 —

會員 市野 瀨 仁

河 川

(一) 井 崎 川

「井崎川は、水源北海部郡津組村字八戸から、南海部郡明治村を経て上野村に至り、幹線（番匠川）に合す。四里の五丁、〇ニ」

と大分県会史（明治四十六、五七）に出ている。該川は、一滄海變じて桑田となる」というが、小さな井崎川の変遷には、そんな大それたものがあるはずがない。川の變遷については、小田井堰のように特別のことがないが、古い時代の資料は皆無と云ってよからう。

ただ古老から、元田前の山、下に川が流れていたとか、古川は名前のように昔は川であったとか、植松の明治小学校の付近は広い川であったとか、など聞くことがあり、それらと関連した伝説もある。なるほど、これらの箇所は、昔、川があったとは思議はなさそうな地形である。

しかし、元田前の話とは別として、他の二か所は、百年や二百年の時間では考えられないうえであるから、ここには深入りしない。川の流路は、いくら小さな井崎川でも、千年や万年単位の尺度から見ると、かなりの変化がある。

のは当然である。川は道路の変化とは違つて、自然の力に負うところが大いから、変化も緩慢であり、長期的であり、かつ不明瞭とならざるを得ない。

一般に、川が大きく変わるのは、大暴風雨のため大洪水となつたり、山崩れをおこして、堤防を破壊するようになるとに起因することが大きい。その一番よい例が、昭和十八年の大洪水による、元田前の堤防破壊で、惨憺たる被害をもたらした。このことは、あとで詳しく述べるとして、最近では、むしろ人為的に川が変貌したところに特色がある。

第一、砂利の採取がひどかつたため、以前深かつた所が浅くなり、浅かつたところが深くなつたりしてゐるのだ。子供の頃の泳ぎ場所を探すのに困ることがある。七十年前頃の話を聞くと、根石の大ダキの下は青い青い淵であつたというし、私達が四十年前の子供の頃は、蛇淵には広い泳ぎ場があつた。そして二つの淵があつて、山から淵に飛び下りては水中深くもぐつて、楽しんだものであつたが、今は草木が繁つてよしが生え、小砂利一つ見えない草原地帯と変り果ててしまつてゐる。

元田の前の川は伏流する箇所が多く、毎年かように夏は瀬川になる。とくに根石の淵が浅くなる。すると大人も子供も集つて、魚を怒らうにする。それがたまらなく楽しいかつた。それが、今では大人も子供の泳ぐ姿をあまり見かけない。第一浅くなつてしまつてゐる。

かつては、ハエと釣つた浅瀬の上流をみると、ここにもヨシが川全面に密生してふさがり、人を通そうとしない。昔は苔の生えた石が浅瀬につづいて陽に映え、せせらぎの音も聞かえていた。今のこの荒涼とした風景は、一体、何の仕業であるのか。数々の想ひ虫を残す、ふる里のこの川を見てみると、じんと悲しさがこみあげて

くる。村の子供達は、昔の樂しくて美しい川を知らないで、一生を過ごすのかと思つると、かちいそうであらうな

い。 一体、どうしてヨシが、このように繁茂したのだらうか。私達が子供の頃は、水際に一すじ、二すじのひ弱なヨシが生えていたぐらいのものであつたが……。

植物の先生に聞いたら、こう話してくれた。

昔の河岸は竹藪であつたが、今はコンクリートの堤防でかためられた。下流に堰堤ができたので、大水が出ても根こそぎに生物を洗い流さないのではなからうか。ヨシは多年生の植物で、しかも密生するので陽が下まで十分当らない。それで、外の植物はそだちにくいので、ヨシが傍若無人に振舞うのである。また、竹藪もよく育つたので、竹、子を取りに行くのでないし、子供は学校のプールに泳ぎに行くし、人々が川に対して無関心になつてしまつた。その上、上流から汚染した水が流れて来たため、ヤマメ、アユ、ウナギ等がへり、ハエが多くなるなど、植物相だけでなく動物相にも変化を来たした。

こうして、一応短期的に川の変貌をみると、大きな流れこそ変わっていないが、水と石と魚のすむ川は、ヨシという巨大といつていい植物が蹂躞し、川の構造を変革して、科学文明に挑戦するように見える。

一方河岸は白いコンクリートに固められた堤防と、赤い瓦だらけの欄干と、コンクリートの橋の上と、時おり車が通り、小さな牛蒡川も近代色に染まつた。川原の粗糲さと不調和が、気になつてしようがない。

(二) 水害とその対策

(1) 水害

○大正元年の洪水

大正元年九月二十八日から降り出した雨は、十月二日に至り、ついに集中豪雨となり、元田部落に甚大な被害をもたらした。

先ず下組の市野瀬学舎の後山が、巾五メートル高さ二十五メートルにあたり山崩れがして、学舎を押しつぶしてしまつた。幸いに人命には被害はなかつた。これに続いて中組の児玉栄宅が、巾十メートル高さ十三メートルにあたり後山が崩れ落ち、蟻座を押しつぶして、栄の父親が蟻座の下敷になつて死亡した。それから間もなく、谷川弥佑宅が丸山から巾八メートル、高さ三十メートルにあたる山崩れにより母屋が押しつぶされ、三人死亡、二人重傷の大惨事が起きた。相次ぐ不幸に村人は驚き、救出し、振出し作業は大変なものであつた。

この時の山崩れのため、荒木谷は土砂で埋まり、濁流は旧小学校の校庭へ流れ込んで、校舎が危険になつた。眞井先生は「真影へ大正天皇のお写真」と持つて、民家に避難した。

○昭和十八年の大洪水

台風にとまなう集中豪雨のため、市野瀬信義所有の吹越のクヌギ山に起きた山崩れは、猛威をふるい、谷ぎわの杉木立や岩石を、岩盤ごとくまで押し流した。これのため、下流の方は護岸が見えなくなるまで土砂や石が堆積し、人家や道や田畑など大災害をうけ、荒木の谷は様相を一変してしまつた。

復旧には児玉輝喜が陣頭指揮し、部落民もよく協力したので、約半年かかつて復旧した。荒木川が流れこむ井崎川は、新地の堤防を突つ切り、五所歩の水田を一瞬の間に変及こみ、元田の前は荒れはてた河原となつてしまつた。現在の国道一〇号線は跡形もなくなくなり、通行人の荷物や馬や人の背で運んだほどであつた。この復旧には

木馬や車力などを使い、出夫は村人ばかりでなく、学校生徒の勤労奉仕の出動もあつたほど大がかりで、ある一年ばかりかかつて原形にかえすことかできたやうである。

○昭和二十年の大洪水

九月十七日に襲来した枕崎台風は、人家には大きな被害はなかつたが、またしても荒木谷は大洪水で氾濫し、三メートル以上も埋もつた。この土砂や石の除去作業のため、村人は想像以上の苦勞をした。

部落は村上組からレールとトロツコを借受け、土砂を下流の河原まで運び出した。この際、左岸を中流くして自動車を通れる部落道、兼林道を作つた。このとき、護岸の石積み工事は、堅田村の穴見組が施工した。

○昭和二十三年の台風

この台風は風が強く、数年前建てた杉皮ぶきの公民館を吹き倒してしまつた。大間小学校の西側校舎も倒壊し、明治村内では外に民家二戸が倒壊している。

その後、公民館は瓦ぶきの頑丈なものを選んだ。建築費用は共有林の杉を売つてまかなつた。

この台風で、堤防とのり越えた水は、田畑三反歩に被害を与えたが、復旧作業は今度個人持ちで、補助金と自己負担金とで施工したという。

(2) 対策

○荒木川の砂防工事

荒木谷の下流に没つてできた集落が、荒木組と中組の一部である。したがつて、荒木谷の山崩れや事故は、洪水の度毎に心配であつた。それが不幸にして、昭和十八年の大水害となつて、現実のものとなつたわけである。

村人たちは、その対策にしんけんに取り組み、砂防工事が実行に移されたのは、終戦の翌年、昭和二十一年であ

つた。以下、砂防工事について列記してみよう。

1. 昭和二十一年 山ノ神舟迄(五長御鱒庄一)

2. 〃 四十二年 赤崎の砂防工事(五長荒木泉)

〃 〃 四十四年 第二砂防の赤崎の下(五長荒木泉)

赤崎の下、五〇メートルの起点から元田橋まで、繞々延長五〇〇メートルの長さにおたり、見事水流動滞が完成した。

こうして、舗装された林道と荒木谷はコンクリートに固められ、近代化の美しさと安全さを一応保つことができた。なお、この工事はすべて上浦土建の施工であったが、その根まわしと、経済的基礎は祖先から受継いだ共有財産の山林売却と、部落民の知恵と協力一致の賜であつた。

○井崎川の堤防工事

昭和二十五年、元田前から広瀬入口上の間、約五〇〇メートル区間の井崎川堤防工事を、県の耕地課関係の補助事業として、部落が直営工事として県から請負つた。

総工費四一万四、二八〇円の資金は、大分勧業銀行から借入れた。作業は、核石・石積み・雑役の三班に分けて施工した。石は広瀬の灰石山とその下の水田に落ちていた大きな灰石を割って使用した。

出夫日当は、男一五〇円・女一〇〇円であつた。世話人及び長市野瀬清・副川野左甚光・会計見玉勝巳、工事促進委員荒木正行・荒川栄市・御鱒庄一・本田一・市野利利義・川野左甚光、書記は副が兼任した。

当時且経済界が不況で、現金収入が少なかつたため、部落民の出夫率は大変よい成績であつた。

(三) 元田井路と上水道

(1) 元田井路

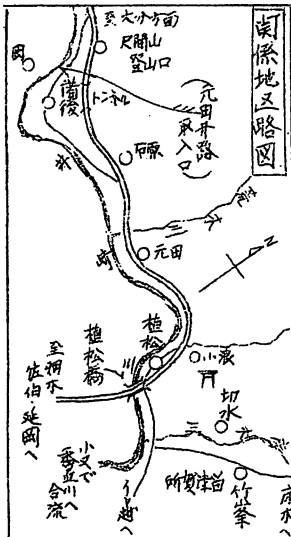
元田井路のことを知るには、備後井堰の歴史的な経緯をたしかめておく必要がある。

正徳年間というから今から二百六十数年前、佐伯藩主六代高慶公の指示によつて、尺間・大坂本地区に流れる井崎川の水を、灌漑用水のため水路を開き出したことには始まる。その範囲は、備後・折原・元田・宮ノ下、所賀津留の、約四十所歩の全地域におたつて計画されたものである。

以上の話は、切水の所賀藤太郎(所賀藤の養父)が、その記録された資料を持つていたのであるが、佐伯市の某商人の手に渡り、今ではその所在は不明である。この水路は、尺間の横いせの淵から取入れ、道路下をくぐつて作られたもので、大正の末期までは、全地域に配分、給水されていたのであるが、年毎に水不足となつてきた。

一番下の所賀津留では、これが対策について研究したが、地域民の意見がまとまらぬまま、昭和二年頃、大地主側と話し合つて、切水の疎治一が自分の土地に井戸を掘り、給水施設を作つて一部の人ではあつたが便をばかつた。

しかし、打続く水不足のため、昭和二十四年頃前記の井戸を拡張し、電動力によつて所賀津留全地域に配水することになつたので、上流の備後井堰と縁を絶つことができた。



その後、残る上の地区は備後水路の修理によつて復活を続けつつあったが、相変らずの水不足に悩んでいたので、

昭和三十三年、宮ノ下津留地及も小浪の上に井戸を掘り、電動力によつて水揚揚をする事となつたので、これに備後水路と縁を絶つた。

以上の結果、元田より上だけ、この水路の管理をしながら続けてきたが、日照りが続けば元田地にも水不足となるので、昭和三十八年、荒木川と井崎川の合流地点の上河原の寄洲(官有地)に井戸掘りをして電動力によつて、本水路に送り込む工事を完成した。工事施工者、切畑の中川守であつた。元田部落は今のところ備後水路を利用し、万一の場合に補給する事となつたので、元田部落の古川までは、安心して稲作ができるようになった。

約四倍の長さ、四十町歩の水田とに給水した二百坪の灌漑水路、よくも長く保たれたものと思ふ。今では井堰からの取入れ口の不備とか、土砂が埋つて水の引込みが悪くなったとか、川底全体が上つたとか、組合員の水路補修に熱意がなくなつたとか、様々な理由をあげているが、これも無理のないことであらう。事も経たし、以前にかえすことは、もはや不可能であらうといわれている。

油や電動力等の機械化も、地区ごとに独立して給水することができるようになつたのも、時代の移りかわりの現れであらう。

なお、元田にはこの水路に關係なく、荒木川と丸柳川によつて稲作をしている家も二、三あることもしつげ加えておく。

(2) 上水道

昔から元田の人々の生活用水は、谷水や井戸水を汲んでいたのであるが、経済生長に伴はない、生活改善の意識が各地に高まってきた。

昭和三十三年、時の佐長市野瀬善之は部落民とはか、簡易水道を設置することを決めた。

水道は荒木部落の奥一、二〇分の谷間に水源を求め、荒川市定の上にある荒木正人の土地を購入して、その場所にくみ上げ、元田四十戸の全域にあつて配水することになった。翌三十四年一月九日、蛇口をひねると清冽な水が目とびしり出るのを見て、部落民の喜びはひとしおであつた。工事は、一期、二期合わせて一七四万円と要した。

しかし十余年の間には、いろいろの問題がおきてきた。例えは水量不足とか、荒工施設の故障のため、蛇口をひねつても水が出なかつたり、水道係員に迷惑をかけることになり、保健康所に水質検査を依頼し、結局新案を立てることとなつた。

昭和四十八年、時の佐長市野瀬善之は皆にはかり、上河原の水田用水の井戸から、電力によつて一旦荒木の野水地に汲上げ、これを全戸に配水する議がまとまつた。つまり谷水を止して、井崎川の伏流水の井戸を活用して、元田の人々の飲用水とする事となつた。

早速元田の水田関係者の同意を得、弥生町の了解を求め、大分市の富士電気株式会社と契約して工事に着手した。

なお、この上河原の水田用水井戸は、昭和三十八年に掘さく以来まだ一回、昭和四十九年六月の濁水にスイツキを入れたの及ぶ、水田の水は備後井堰の水路で足りている。そんなことで、元田の簡易水道の水源は、ほとんどこの上河原の水田用水井戸のみと、専ら活用しているのが現状である。